

# 日本細菌学会 平成 27 年会務総会記録

日時：平成 27 年 3 月 27 日（金）13：00～14：30

会場：長良川国際会議場 1 階メインホール

年次学術総会長である江崎氏が議長を務めた。  
会務総会に先立ち、堀口理事長から挨拶が述べられた。現在学会の財政状況が悪いため、これを改善するための協力要請がなされた。

## I. 物故会員報告

堀口理事長より、平成 26 年 3 月 18 日～平成 27 年 3 月 14 日に逝去された名誉会員 2 名（佐々木正五氏、寺脇良郎氏）、正会員 6 名（伊藤輝代氏、大友良光氏、齋藤玲氏、柴田恭子氏、牧野 潔氏、三木康弘氏）の物故会員について報告があり、出席者全員で黙祷が捧げられた。

## II. 会務報告

### （1）会員の現況

川端庶務理事より、平成 27 年 3 月 17 日現在の会員数について、名誉会員 38 名（-2 名）、正会員 1,961 名（-112 名）、学生会員 491 名（-123 名）の合計 2,687 名、賛助会員 29 社（+2 社）[いずれも（）内の数字は、今年の会務総会報告で報告された数字との差]であることが報告された。今理事会体制中に増加させたいことが述べられ、各方面へも協力要請がなされた。

### （2）各種部会活動

- ・賛助会員担当の西川理事より、現理事会では理事 1 名あたり 3 社の新規賛助会員開拓を目標としており、新執行部体制が開始して 3 ヶ月弱で既に 6 社（7 口）の新規入会があったことが報告された。会員各位にも協力要請がなされ、企業自体への依頼よりも、企業内に知り合いがいた場合はその方に直接依頼していただきたい旨が述べられた。
- ・シンポジウム企画調整担当の中川理事より、堀口第 89 回総会長と共に企画調整を行っており、例年と異なり 3 日目の午後まで企画を組むことや、日本臨床微生物学会等の他学会との共催企画も検討していることが述べられた。
- ・教育部会担当の松下理事より、同部会の 2 つの委員会について、活動・役割が説明された。  
次世代教育・人材育成委員会では、これまでは千葉大学の野田公俊氏を中心に小中高の学生を対象とした細菌学普及の為の無料出張講演が継続的に実施されてきたが、財政状況悪化に伴い、本活動については本年度は一時停止し、これに係る予算も計上しなかったことが説明された。また、若手人材育成プログラムとして、本年実施される「第 9 回若手細菌学コロッセウム」を支援するが、同プログラム支援費を例年の 45 万円から 30 万円に減額することも説明された。本委員会には、昨年度、本年度、次年度の細菌学若手コロッセウムの代表世話人を委員に加え、その運営方法や位置づけ、また若手人材育成プログラムのあり方について議論していくことが述べられた。

続いて、教育資源発掘・保存委員会では、2012 年 5 月より新版の作製が着手されている教育用動画「グラム陽性球菌の同定」・「グラム陰性桿菌の同定」の作業経過としてサンプル動画が公開されたが、財政状況悪化に伴い、動画完成をもって業者委託を終了することが説明された。さらに、今後の活動として、人獣共通感染症といった獣医学領域に映像資料を求めていくことや、「私のベストショット（仮）」企画で団塊の世代の先生方に映像資料を求めていくことが述べられた。

・学会誌担当の大西理事より、日本細菌学雑誌はこれまで紙媒体と電子媒体(J-stage)で発行されてきたが、平成26年第4回理事会決定により、冊子体発行については、合冊号は第69巻をもって終了し、総会号は来年(2016年)からはプログラム部分のみを発行することが説明され、今後は電子ジャーナルのみになることが述べられた。

・MI誌担当の川端理事より、現在はインパクトファクター(IF)は1.3であり、ここ数年は1.53~1.57であるので、これを上げていくことを課題としていることが説明された。浅川賞および小林六造記念賞受賞者の総説を掲載することや、1月~3月頃にレビューを掲載していくことを具体的な改善策としていることが述べられ、会員各位にも投稿の協力要請がなされた。また、本誌を共同発行している日本ウイルス学会と日本生体防御学会との合同会議を設けて、この課題への取り組みについて直接検討していくとのことであった。

### (3) 学会賞選考経過

平山学会賞選考委員長欠席のため、大原委員により、受賞者および選考経過について報告がなされた。平成26年10月16日に東京駅八重洲クラブ会議室に選考委員会を開催し、浅川賞には東北大学大学院医学研究科の赤池孝章氏の「細菌感染における酸化ストレスシグナル制御と感染防御論」、小林六造記念賞には国立国際医療研究センター研究所の秋山徹氏の「レンサ球菌の病原性とゲノム進化に関する研究」、黒屋奨学賞には山口大学共同獣医学部の清水隆氏の「マイコプラズマの病原因子の解析」、学習院大学理学部の中根大介氏の「細菌の滑走運動メカニズムに関する研究」、日本学術振興会海外特別研究員の古田芳一氏の「ピロリ菌のゲノム・エピゲノムの多様性の解析」、鹿児島大学大学院医歯学総合研究科の松尾美樹氏の「グラム陽性菌の抗菌性因子耐性獲得機構に関する研究」が選出されたことが報告された。

### (4) 平成26年度収支決算

神谷前理事長より、会場前方のスクリーンに表示された平成26年度決算書をもとに報告がなされ(詳細は評議員会と重複するため割愛する)、約1,000万円の赤字決算となったことが説明された。例年になく支出項目が幾つもの一度に重なったことがその一因ではあるが、収入が減少しているにも関わらず、通年支出する項目に対する対策を取らなかったことについて反省が述べられた。昨年1年間かけて理事会で財政状況改善について議論し、総会支援金の減額、学会誌の電子化、役員選挙年の有権者名簿公開方法の変更等により支出を減額することとして、今期からの新理事会に引き継いだことが説明された。

続いて、平成26年度の黒屋奨学賞決算についても報告され、収入は利息のみ、支出は受賞者4名の副賞費であることが説明された。なお、現行の運営方法で今後も最大受賞者数4名が選考され続けると約13年で本賞基金の原資が尽きるため、新理事会に今後の対策について検討依頼したとのことであった。

### (5) 平成26年度会計監査

江崎監事より、太田監事と共に監査を行ない、報告内容に間違いがないことを確認したことが述べられた。

### (6) 平成27年度収支予算

堀口理事長より、会場前方のスクリーンに表示された平成27年度予算書をもとに説明がなされた。(詳細は評議員会と重複するため割愛する。)また、平成11年度以降の決算額一覧も提示され、平成22年度以降は連続して赤字決算であり、対策を取らずに運営していくと約4年で破綻する非常事態であることが述べられ、会員の急激な増加見込みは少なく、会費を含めた収入増は極めて難しい状況のため、支出における対策を取るしかないことが説明された。現在各支部に対してもその活動方法の変更に関して提案をしていることが述べられ、各方面へも協力要請がなされた。

続いて、平成 27 年度黒屋奨学賞予算についても説明され、収入は利息のみ、支出は受賞者 4 名への副賞費であるとのことであった。

#### (7) 第 8 回若手研究者育成プログラム終了報告

本プログラムとして採択された「第 8 回若手細菌学コロッセウム」の代表世話人である東 秀明氏（北海道大学人獣共通感染症リサーチセンター）より、終了報告がなされた。本企画の主旨は若手細菌学研究者による研究交流や横のつながりを作ることであり、企画・運営についても若手研究者（大西なおみ氏・北海道大学人獣共通感染症リサーチセンター、鹿山鎮男氏・広島大学大学院医歯薬保健学研究院、田端厚之氏・徳島大学大学院ソシオテクノサイエンス研究部、中根大介氏・学習院大学理学部、中山秀喜氏・京都産業大学総合生命科学部、松尾美樹氏・鹿児島大学大学院医歯学総合研究科）により行われたことが説明された。平成 26 年 8 月 6 日～8 日までの 3 日間、北海道のホテルニセコいこいの村で開催され、演題数は一般演題 41 題、企画セッション 14 演題、特別講演 2 題、ランチョンセミナー 3 題であったこと、また、参加者数は 94 名で、子供連れの研究者も参加しやすいように託児室設置やベビーシッター手配を行なったとのことであった。本企画の収支決算書も提示され、収支共に 1,869,260 円であったことが報告された。細菌学研究者の育成や増加を目的に、他分野交流の検討も含めて今後も本企画を継続していきたいこと、また、支援を受けた学会に対して、また協力者、参加者に謝辞が述べられた。最後に、第 9 回の開催が本年 11 月に企画されていることが報告された。

#### (8) 次期（第 89 回総会）総会長挨拶

堀口次期総会長より、会期は平成 28 年 3 月 23 日（水）～25 日（金）、会場は大阪国際交流センター、テーマは「Enjoy Bacteriology 横断的微生物研究コミュニティの創生と確立」であることが報告された。分野交流を図り、専門的分野の中から共通の横軸を見つけていくなど、シンポジウム企画調整担当の中川理事と各種相談しながら企画していくとのことであった。また、例年より多く会場を確保し、総会 3 日目の午後までプログラムを組むことが述べられた。

#### (9) 次々期（第 90 回）総会長挨拶

江崎議長より、3 月 25 日に開催された評議員会にて、理事会から推薦された赤池孝章氏の就任が承認されたことが報告され、同氏より挨拶がなされた。会期は 2017 年 3 月 19 日（日）～21 日（火）、会場は仙台国際センター展示棟を予定しており、過去に非常に少ない東北での開催となることが述べられた。新規開通予定の地下鉄もあることから、交通の便も良いとのことであった。

### III. 議事

#### (1) 会則改訂について

議事に入る前に江崎議長および本議事説明担当の神谷前理事長より、会務総会で議決する条件は正会員・学生会員総数の 1/5 が出席していること（委任状も有効）が説明され、出席者 130 名、委任状は 380 名分提出されていることから、条件を満たしていることが述べられ、議事に入った。

神谷前理事長より、前理事会体制時の評議員会において会員資格、学会賞選考内容の見直しを希望する声が挙がったため、会則等検討ワーキンググループを立ち上げて各種見直しを行い、グループ発足後の後半からは財政状況改善のための改訂についても検討を行なったことが述べられた。検討の結果、財政状況改善に係る部分以外については基本的には文言の微修正で十分と判断したことや以下の説明がなされた。

- ・会則・細則・内規それぞれを章・条建てにした
- ・除名の対象として会費未納者が含まれていたが、「資格喪失」の対象に変更する
- ・財政状況改善には学会誌の冊子体発行を終了することが必要と判断し、そのため学会誌への掲載が必要とされている箇所を全て「学会誌等」として、ホームページを使用可能とする

なお、会場前方のスクリーンに改訂内容が表示されたが、これらは学会ホームページ上で会務総会 1 ヶ月前から公開していることが付け加えられた。

審議の結果、会則改訂が承認された。

#### **IV. 学会賞授与式**

堀口理事長および寄贈元である学校法人北里研究所の中山哲夫氏より、浅川賞が赤池孝章氏に、小林六造記念賞が秋山 徹氏に授与された。また、黒屋奨学賞は清水 隆氏、中根大介氏、古田芳一氏、松尾美樹氏に堀口理事長から授与された。その後、中山氏と堀口理事長より祝辞が、赤池氏より受賞者を代表して謝辞が述べられた。